

平成8年度

# 児童生徒の豊かな人間関係を育てるために

——「いじめ」の現状；10年前との比較を通して——

川崎市総合教育センター 人権尊重教育研究会議

# 児童生徒の豊かな人間関係を育てるために

## － 「いじめ」の現状；10年前との比較を通して －

人権尊重教育研究会議

萩原 優<sup>1</sup> 朝倉 安弘<sup>2</sup> 下田 照雄<sup>3</sup> 中嶋はるみ<sup>1</sup> 永延 道代<sup>5</sup>  
枝村 知<sup>6</sup> 本間 宏敬<sup>7</sup>

### 要 約

近年の児童生徒の生活は、登校拒否（不登校）、いじめ、非行、自殺等の児童生徒の人権そのものに関わる重要な問題を提起している。児童生徒に関わるこうした様々な現象の中でも、「いじめの問題」は児童生徒の生命に関わる重大事にまで発展し、全国的にもその解決を急がれている課題である。この「いじめの問題」は児童生徒一人ひとりの尊厳を損ないかねない現象であり、本市における人権尊重教育の最重要課題として位置付けられる。そこで、当センターが昭和60年度に実施したいじめについての全市的な調査の内容を一部修正して実施し、現在のいじめの実態を把握すると共に、10年前のいじめとの比較を行い、新しい視点からの「いじめ問題」解決のための指導に役立つ資料を作成したいと考えた。

調査は川崎市立小・中学校14校の児童生徒（小学校4・5・6年、中学校1・2・3年）を対象に行い、有効数2738（回収数=2815）の回答を得た。分析と考察の視点は次の3点である。

- ①本市における「いじめ」の実態及び「いじめをなくす」ための児童生徒の考えを探る。
- ②本市における10年前の「いじめ」の実態と現状の比較を通して、現在の「いじめ」の特徴を把握すると共に、「いじめをなくす」ための今後の指導・支援の課題を探る。
- ③「いじめ」の現状の分析・考察を通して、教師と児童生徒、児童生徒同士の人間関係を豊かで思いやりのあるものとする指導に資する資料を作成する。

いじめられた体験者といじめた体験者の実態と10年前の調査結果との比較から、10年前のいじめの構造には見られなかった「いじめの立場の変化」の現象が明らかになった。「いじめ」があった時の行動と意識の分析からは、いじめられた体験者といじめた体験者の「いじめ」への対応や意識の違いが明らかになると共に、「観衆」や「傍観者」の立場にいるいじめた体験者への指導・支援の重要性が認められた。また、児童生徒の大半が「いじめをなくす」ためには何よりも教師の支援と努力が必要であると考えていることが、今後の「いじめ」の指導・支援の最大の課題であることも明らかとなった。

キーワード：いじめ、人権尊重教育、児童・生徒指導、学級経営、学年経営、学校経営

### 目 次

はじめに

I 主題設定の理由	190	4. いじめられた体験といじめた体験の比較	195
II 研究の方法	190	5. いじめへの対応5タイプを探る	197
1. 調査内容の作成について	190	6. 「いじめをなくす」ための課題を探る	198
2. 調査の実施と分析方法について	191	7. 子どもたちの声	199
III 研究の内容及び結果の考察	191	IV まとめと今後の課題	199
1. いじめの態様別の加害・被害・見聞 の実態と意識	192	1. 本市の「いじめ」の特徴	199
2. 学級・学年で起きている「いじめ」	193	2. 「いじめをなくす」ための課題と対応	199
3. いじめ体験を探る	194	3. 今後の課題	200
		おわりに・先行研究・参考文献・指導助言者	

<sup>1</sup>川崎市総合教育センター研修指導主事 <sup>2</sup>川崎市総合教育センター研修指導主事 <sup>3</sup>川崎市総合教育センター研修指導主事 <sup>4</sup>川崎市総合教育センター研修指導主事 <sup>5</sup>川崎市総合教育センター研修指導主事  
<sup>6</sup>川崎市総合教育センター生涯学習研究室副主幹 <sup>7</sup>川崎市総合教育センター教育課題研究室長

## はじめに

国際化、情報化、価値観の多様化等、社会変化が著しい中で、「児童生徒の自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる能力の育成」へ向けて、学校だけでなく家庭や地域社会をも含めた教育のあり方が課題となっている。一方、「子どもの権利条約」の批准に象徴されているように、子どもたち一人ひとりの人権の保障と確立が教育の重要な今日的課題ともなっている。そして、この能力の育成は、子どもたち一人ひとりの人権の尊重と子どもたち相互に人権を尊重し合う態度の確立がなければ、実現の可能性はないとさえいえる。子どもの主体的な生き方やその基盤となるべき自己教育力の育成は、人間的存在の保障ともいえる人権尊重の姿勢や態度のある人間集団においてこそ育まれるものであろうし、その育成の基盤には相互尊重による豊かな人間関係の形成が必須である。「いじめ」が生じ、それが許されている集団の中では、個人への尊重の意識や態度が大切にされず、自己教育力を育てる基盤を形成できないといえる。

## I 主題設定の理由

現代の児童生徒を取り巻く環境には、登校拒否（不登校）、いじめ、暴力、自殺等の人権そのものに関わる重要な問題が山積している。特に、「いじめの問題」に関しては児童生徒の生命に関わる重大事にまで発展し、全国的にもその解決を急がれている緊急課題であるといえる。

平成7・8年度の川崎市総合教育センターの児童・生徒指導の研究成果によると、「自己や他者を積極的に受容している子どもは、他者尊重の傾向を示しており、人権的な事象に公正な判断をし、行動意欲を持つ子どもは支援行動をとりやすい傾向にある。・・・また、子どもたちの交友関係は、表面的には他者友好の関係を保っているが、少しのきっかけで不信を抱くような希薄な人間関係となっていると考えられる。」<sup>1)</sup>とあり、他者を受容し、相手の人権を尊重する態度を持つことが、「いじめの問題」を解決していく指導・支援の基盤になると示唆している。そして、「いじめ」の温床にもなる人間関係の希薄さが子どもたちの交友関係に潜んでいるのではないかと指摘している。また、10年前に実施した全市的ないじめの調査結果ではその当時の「いじめ」の実態を、「クラスの中にいじめがあっても、見て見ぬふりをする子やいじめられても我慢する子が多い。こうし

た実態からいじめそのものが大変見えにくくなっているといえる。しかも、いじめられている子が、そのことを教師に訴えてくることは非常に少ない。それは、訴えたことによって、さらにいじめられるという不安や恐怖、また、教師への不信の気持ちがあるためでもある。」<sup>2)</sup>と述べている。こうした本市の先行研究での「いじめ」や「子どもの人権」に関わる指摘や10年前の調査結果を受けて、現在の子どもの「いじめ」の状況や特徴を把握し、実態に応じた指導・支援の課題を考え、いじめをなくすための努力をすることが必要である。

そこで、この「いじめの問題」を人権尊重教育を実践していく上で把握しておくべき重要な問題として捉え、いじめの実態調査を通して、指導・支援上の課題を見出し、教師と児童生徒、児童生徒同士の間の人間関係を豊かで思いやりのあるものにするを旨とする指導に資する資料を作成したいと考える。また、10年前に実施したいじめの調査内容を一部修正して実施し、10年前との比較を行い、新しい視点からの「いじめの問題」解決のための資料を得たいと思う。そして、このようなねらいの達成が今日の人権尊重教育に与えられた教育課題であると考え、この研究主題と副主題を設定した。以下に本研究のねらいをまとめてみる。

- 本市における「いじめ」の実態及びいじめをなくすための児童生徒の考えを探る。
- 10年前の「いじめ」の実態と現状の比較を通して、現在の「いじめ」の特徴を把握すると共に、「いじめをなくす」ための今後の指導・支援の課題を探る。
- 「いじめ」の現状の分析・考察を通して、教師と児童生徒、児童生徒同士の間の人間関係を豊かで思いやりのあるものにする資料を作成する。

## II 研究の方法

### 1. 調査内容の作成について

#### (1) 調査の目的

現在のいじめの実態を把握し、10年前の調査結果との比較を行うことで、いじめをなくすための指導・支援の課題を探り、教師と児童生徒、児童生徒同士の間の人間関係を豊かで思いやりのあるものとするを旨とする指導上の資料を作成する。

#### (2) 調査の柱と内容

10年前の調査結果との比較ということから、10年前の調査の柱と内容を基本としたが、現在の全国的ないじめの傾向を考慮し、柱と内容の一部分を修正した上で、設

<sup>1)</sup>川崎市総合教育センター 児童生徒指導研究会議「他者を尊重する意識の高揚と実践力を育む児童生徒指導」1996年

<sup>2)</sup>川崎市総合教育センター 児童生徒指導研究員会「小・中学校の学校生活—いじめの実態についての意識調査」1985年

問の内容や表現、また選択肢の内容を加除修正した。

【調査の内容】（\*）は10年前にはなかった内容

①調査対象者の属性（児童生徒のプロフィール）

○学年・性別・体つき・勉強・運動・行動・友人・転校の有無と時期

○所属学級集団の雰囲気と本人の位置・担任との関係

②いじめの態様

○態様別の加害、被害、見聞の体験・態様別のいじめについての価値判断

③学級・学年で起きているいじめ

○いじめの態様・時期と期間・場所・時間帯・関係者の人数・教師の認知

④いじめの体験

○態様別のいじめられた体験・いじめられた時の対応・その時の心情

○いじめた体験とその時の心情

⑤人をいじめたくなる理由

○自分の理由（\*） ○相手の理由

⑥いじめられている友だちへの対応とその理由（\*）

⑦いじめがあった時の行動と心情

○自分の行動と心情

○周囲の人の行動と心情の認知（\*）

⑧いじめへの考えと「なくすため」の課題

○いじめについての考え

○いじめが起きた時の教師への要望

○いじめをなくすための教師や学校への要望（\*）

○いじめをなくすために自分にできること（\*）

○いじめについて思うこと（自由記述）

上記の①～⑧が調査の柱と調査内容の全体構造であるが、⑤の「自分の理由」は10年前の調査では設定されていなかった内容である。近年のいじめの原因の一つとして子どもたち自身のストレスが大きく影響していると思われるので、付け加えた内容である。⑥は対応だけであったが、理由も付け加えた。⑦は、子どもたちがいじめの周囲にいる人間の行動と心理をどのように見ているかを聞いたものであり、いじめに関わる人間関係といじめの構造を明らかにするために付け加えた。⑧の教師や学校への要望と自分にできることは、子どもたちが現在の「いじめをなくす」ためには、何を必要があると考えているかを探るために付け加えた。子どもたちの具体的な対応策を分析することで、教師の指導・支援のあり方を改めて見直すことができると考える。

## 2. 調査の実施と分析方法について

この研究は主題設定の理由で述べた通り、人権尊重教育の視点から、緊急課題として位置付けられるものであるため、1年間の研究としてスタートした。そのため、

調査用紙ができ次第、調査を実施した。また、10年前の調査内容を基本にしているため、その時の調査結果を調べた結果、予備調査は必要ないと判断した。

(1) 調査の形式

○自記式質問紙法（選択式、一部記述式）

(2) 調査期間と方法

○平成8年10月2日～10月11日

○配置留置法

(3) 調査対象 川崎市立学校の児童生徒

○小学校4・5・6年 各区1校 7校 1343人

○中学校1・2・3年 各区1校 7校 1472人

計 14校 2815人

○回収数=2815 有効数=2738（無効=77）

<調査内容に無回答の多いものは無効とした>

(4) 分析方法について

クロス集計は、属性を基本とし、小・中学校別、男女別、小・中学校男女別、学年男女別、いじめの体験別で行い、カイ二乗検定の（ $P<.05$ ）以下を有意水準とした。問2「所属集団の雰囲気と本人の位置・担任との関係」は、属性ごとの平均値を算出した。この研究では、各設問の回答分布の結果と「いじめの体験別」の分析が主となるので、単純集計、クロス集計のみの分析を行い、多変量解析による分析は行わなかった。データ分析は、全て統計処理ソフトSPSSを使用して行った。

## Ⅲ 研究内容及び結果の考察

ここで示す研究内容は、調査内容に基づいた①から⑧（問1～問15）までの分析結果と考察である。紙面の関係から詳しい分析結果と調査用紙は掲載できないので、紀要別冊を参照してほしい。調査対象人数は表1に示した通りである。

表1 学年別・性別人数 (%)

	男子	女子	合計
小学4年	217(51.7)	203(48.3)	420(15.3)
小学5年	243(53.4)	212(46.6)	455(16.6)
小学6年	226(54.1)	192(45.9)	418(15.3)
中学1年	254(52.7)	228(47.3)	483(17.6)
中学2年	229(48.2)	246(51.8)	475(17.3)
中学3年	241(49.7)	244(50.3)	487(17.8)
無回答	3(0.1)	0(0.0)	3(0.1)
合計	1410(51.5)	1325(48.4)	2738(100.0)

1. いじめの態様別の加害・被害・見聞の実態と意識 表3 「たたいたりけったり」の態様（校種別）

表2 選択肢の内容

【選択肢の内容】  
 ★「やったことがある」、「やられたことがある」、「見たたり聞いたたりしたことがある」の3項目  
 ○「1.よくある」——「ある」  
   「2.たまにある」——「ない」  
   「3.頻度にはあるが、「体験がある」ということから「ある」としてまとめた。  
   ★10年前の集計方法に合わせた。  
 ★「いじめだと思う」の項目  
 1 = いじめだ  
 2 = ふざけや遊びだ（いじめではない）  
 3 = どちらとも言えない（わからない）

この節では、現在の子どもたちのいじめへの態様別の加害・被害・見聞の状況といじめへの意識を探り、10年前の調査結果と比較することを通して、今の子どもたちのいじめの態様と意識について考察する。

(1) たたいたりけったりする（表3）

○小学校の「やったこと・やられたこと・見聞したこと」は、学年別・性別に関わらず80%以上の割合で、「ふざけや遊びだ」という意識も7割前後にも達している。明らかに日常化していると言える。10年前（1985年）と比較すると、各体験者が10～50%の幅で増加しており、現在は遊び感覚で日常化している態様であることが分かる。

○中学校でも、男子に関しては小学校と同様の結果が出ている。10年前との比較でも、ほぼ同じである。女子は、意識面では男子と変わりはないが、やった体験者は男子より20～33%も低い。この態様は小学生と中学校男子に多いと言える。

(2) 無視・仲間はずれ（表4）

○小学校の体験者は、学年が進むにつれて女子の割合が多くなり、6年女子では見聞の体験者が78.1%になる。「いじめだ」と認識している女子が半数もいながら、10年前と比較すると、4年生と5・6年女子の大きな増加が認められる。この態様は低年齢化するとともに、高学年女子に目立つ態様になってきている。

○中学1年女子になると、やった体験者の割合は最高になる。2・3年と減少するが、見聞の体験者は男子より17～24%も多い。「遊びだ」の意識が低いにもかかわらず、10年前より体験者が増え、多発していることを考えると、女子の間では相当深刻にな

小学校		やったこと		やられたこと		見聞したこと		いじめだと思う			N=
学年別	性別	ある	ない	ある	ない	ある	ない	1	2	3	
小4男	1996年	87.6	12.4	86.6	13.4	84.3	15.7	15.3	63.9	20.8	217
	1985年	62.0	38.0	58.6	41.4	74.1	25.9	23.6	30.4	46.0	266
小4女	1996年	82.7	17.3	88.1	11.9	85.2	14.8	8.4	69.5	22.1	203
	1985年	47.4	52.6	50.4	49.6	67.8	32.2	15.0	34.6	50.4	257
小5男	1996年	85.5	14.5	85.6	14.4	88.8	11.2	14.4	65.8	19.8	242
	1985年	57.6	42.4	56.9	43.1	70.9	29.1	25.9	39.6	34.5	278
小5女	1996年	83.0	17.0	85.3	14.7	87.8	12.2	6.6	73.0	20.4	212
	1985年	45.5	54.5	50.0	50.0	71.0	29.0	20.5	42.9	36.6	268
小6男	1996年	85.0	15.0	86.6	13.4	91.6	8.4	12.9	71.1	16.0	226
	1985年	44.2	55.8	56.2	43.8	65.6	34.4	13.9	46.8	39.3	267
小6女	1996年	83.3	16.7	87.5	12.5	90.7	9.4	4.7	76.6	18.7	192
	1985年	39.8	60.2	39.0	61.0	68.8	31.2	14.7	42.0	43.3	231
中学校		やったこと		やられたこと		見聞したこと		いじめだと思う			N=
学年別	性別	ある	ない	ある	ない	ある	ない	1	2	3	
中1男	1996年	89.0	11.0	84.1	15.9	88.9	11.1	14.2	71.9	13.9	254
	1985年	64.6	35.4	61.6	38.4	74.8	25.2	43.5	30.1	26.4	297
中1女	1996年	70.6	29.4	75.0	25.0	87.7	12.3	6.6	76.3	17.1	228
	1985年	33.9	66.1	33.0	67.0	61.9	38.1	36.7	37.8	25.5	271
中2男	1996年	89.9	10.1	83.7	16.3	91.6	8.4	13.2	69.6	17.2	229
	1985年	52.2	47.8	46.7	53.3	59.2	40.8	26.1	35.7	38.2	276
中2女	1996年	57.3	42.7	61.0	39.0	88.2	11.8	7.8	71.4	20.8	246
	1985年	25.7	74.3	24.7	75.3	47.7	52.3	36.3	33.5	30.2	280
中3男	1996年	84.2	15.8	83.0	17.0	90.5	9.5	12.4	71.8	15.8	241
	1985年	40.7	59.3	42.0	58.0	58.2	41.8	30.5	38.5	31.0	275
中3女	1996年	51.5	48.5	57.6	42.4	83.9	16.1	8.6	74.1	17.3	243
	1985年	15.4	84.6	14.6	85.4	44.2	55.8	34.9	37.6	27.5	266

表4 「無視・仲間はずれ」の態様（校種別）

小学校		やったこと		やられたこと		見聞したこと		いじめだと思う			N=
学年別	性別	ある	ない	ある	ない	ある	ない	1	2	3	
小4男	1996年	44.9	55.1	57.9	42.1	57.9	42.1	40.7	32.9	26.4	216
	1985年	28.5	71.5	37.6	62.4	37.6	62.4	35.0	24.5	40.5	264
小4女	1996年	29.4	70.6	56.2	43.8	61.2	38.8	43.8	24.4	31.8	201
	1985年	17.5	82.5	31.5	68.5	49.2	50.8	37.1	19.6	43.3	263
小5男	1996年	38.6	61.4	46.9	53.1	59.6	40.4	52.5	19.4	28.1	241
	1985年	36.5	63.5	42.5	57.5	57.2	42.8	47.1	27.5	25.4	278
小5女	1996年	34.6	65.4	48.4	51.6	67.8	32.2	52.9	15.9	31.2	211
	1985年	30.6	69.4	36.2	63.8	56.0	44.0	50.4	23.9	25.7	268
小6男	1996年	38.8	61.2	41.5	58.5	70.1	29.9	47.1	22.9	30.0	224
	1985年	24.7	75.3	24.1	75.9	48.2	51.8	34.8	32.6	32.6	249
小6女	1996年	41.1	58.9	51.5	48.5	78.1	21.9	55.2	14.6	30.2	192
	1985年	24.2	75.8	23.7	76.3	61.6	38.4	48.5	15.8	35.7	219
中学校		やったこと		やられたこと		見聞したこと		いじめだと思う			N=
学年別	性別	ある	ない	ある	ない	ある	ない	1	2	3	
中1男	1996年	34.7	65.3	30.2	69.8	56.4	43.6	51.4	20.6	28.0	253
	1985年	32.7	67.3	20.4	79.6	50.5	49.5	82.7	12.0	5.3	294
中1女	1996年	46.0	54.0	41.6	58.4	80.3	19.7	63.0	8.4	28.6	228
	1985年	45.2	54.8	26.1	73.9	60.9	39.1	85.4	12.8	1.8	264
中2男	1996年	35.8	64.2	27.5	72.5	58.0	42.0	56.6	15.4	28.0	229
	1985年	20.9	79.1	13.0	87.0	31.8	68.2	76.3	14.7	9.0	277
中2女	1996年	41.1	58.9	43.1	56.9	75.6	24.4	70.5	9.4	20.1	246
	1985年	27.9	72.1	17.1	82.9	42.5	57.5	79.6	16.1	4.3	280
中3男	1996年	27.0	73.0	25.3	74.7	52.3	47.7	50.4	17.2	32.4	241
	1985年	14.7	85.3	8.7	91.3	29.6	70.4	78.2	16.0	5.8	265
中3女	1996年	27.0	73.0	35.3	64.7	70.8	29.2	64.8	6.1	29.1	244
	1985年	23.5	76.5	13.4	86.6	36.6	63.4	84.8	13.0	2.2	268

っている状況があると思われる。

いじめの態様では、特に体験の割合の多い2つの例を取り上げたが、「かみの毛をひっぱる・体をつねる」「水やどろをかける・石等を投げつける」「かさ、がびょう、鉛筆等でつつく」「言葉のおどし・悪口」「ひやかし・からかい」等についても、体験者は10年前より増加し遊び感覚で行われていることが明らかになっている。また、「プロレスごっこ」と「物をとる・かくす」は男

子に目立つ態様であるが、特に、「プロレスごっこ」は男子特有（男子=16~33%、女子=6%以下）の態様である。「お金や物を取り上げる」「ぬすみをさせる」については、やった体験者も5%未満、やられた体験者も17%未満と少ないが、「いじめだ」の意識は10年前より20~45%低く、「どちらとも言えない」という子どもが20~50%を占めている。このような態様に対して、いじめになるのかどうか判断できない子どもの激増が、現在の「いじめの意識」の特徴である。

## 2. 学級・学年で起きている「いじめ」

表5 いじめの態様の比較（校種・性別）

【いじめの態様】	1996年(現在)					1985年(10年前)				
	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】
1. たたいたり、けつたりする	14.8%	15.4%	10.7%	26.9%	6.8%	20.8%	23.1%	18.9%	28.9%	11.2%
2. かみの毛をひっぱったり体をつねったりする	1.4%	1.6%	1.9%	1.4%	0.9%	2.2%	2.8%	0.4%	4.4%	0.9%
3. 水やどろをかけたり石などをなげつけたりする	0.5%	0.7%	0.4%	1.0%	0.0%	1.4%	1.4%	1.1%	1.7%	1.4%
4. かさ、ほうき、鉛筆などでつついたりする	1.0%	1.6%	0.8%	1.4%	0.3%	1.5%	1.2%	0.4%	3.1%	1.9%
5. 無理やり「プロレスごっこ」をする	3.5%	2.3%	1.1%	3.4%	6.2%	—	—	—	—	—
6. 言葉でおどしたり、悪口を言ったりする	13.6%	14.7%	14.6%	11.2%	13.6%	12.4%	14.0%	14.4%	11.8%	8.4%
7. ひやかしたり、からかったりする	5.7%	6.5%	7.7%	4.8%	4.0%	14.6%	12.2%	14.8%	12.7%	19.6%
8. 物をとったり、かくしたり、汚したりする	11.2%	11.4%	14.2%	9.2%	10.5%	5.7%	4.5%	6.4%	5.7%	6.5%
9. 無視したり、仲間外れにしたりする	26.2%	21.9%	31.8%	12.6%	38.3%	24.2%	17.8%	29.5%	15.4%	35.5%
10. でたらめなうわさを言いふらす	5.6%	6.2%	6.5%	5.4%	4.3%	7.3%	9.4%	9.5%	3.1%	6.1%
11. 無理やりいやがることをする（服を脱がすなど）	5.7%	9.2%	3.1%	6.5%	4.0%	5.9%	8.7%	3.0%	7.0%	4.7%
12. お金やものを取り上げる	3.1%	3.6%	2.3%	3.7%	2.8%	2.6%	3.5%	1.1%	3.1%	2.8%
13. ぬすみをさせる	1.9%	2.0%	1.5%	3.1%	1.2%	1.4%	1.4%	0.5%	3.1%	1.0%
14. 使い走りやさせる（無理に用事を言いつける）	4.0%	2.0%	1.9%	7.1%	5.6%	—	—	—	—	—
15. わざとらしくしていい言葉を使う	1.9%	2.0%	1.5%	2.4%	1.5%	—	—	—	—	—
※無回答=1550	・回答=1188									
	N=1188	N=306	N=261	N=294	N=324	N=992	N=286	N=264	N=228	N=214
	(43.4%)	44.6%	43.0%	40.6%	45.1%	(30.5%)	35.2%	34.6%	26.7%	26.0%

表5は、自分の学級・学年でいじめを見て、一番気になる態様をあげた子どもの割合である。一番気になるということから、現在、起きているいじめであると捉えた。全体では43.4%の子どもが目撃しており、校種・性別の差はほとんどない。10年前と比べると、いじめの目撃の割合は12.9%多くなっており、小・中学校共にいじめは確実に拡大してきていると言える。

いじめの態様では、「無視・仲間はずれ(26.2%)」が最も多く、「たたいたりけつたり(14.8%)」「言葉のおどし・悪口(13.6%)」がそれに続いている。「無視・仲間はずれ」の態様は女子に目立ち、中学校女子は男子の3倍以上になっている。実際にいじめられた体験者でも、小学校男子12.2%、女子25.0%、中学校男子12.0%、女子41.6%という結果が出ている。一方、「たたいたりけつたり」は現在起きているいじめとしては男子に多い態様である。男子は身体的暴力、女子は精神的いじめの態様が現在のいじめ行為である。10年前との比較では、暴力行為は減少している反面、「無視・仲間はずれ・物かくし」の増加が認められ、いじめの態様はより陰湿化している傾向

表6 いじめの目撃者と体験者の学級の雰囲気

①私のクラスは楽しい	小学校				中学校			
	【全体】	【見】	【いじ】	【いじ】	【全体】	【見】	【いじ】	【いじ】
1. そうでない	4.9	6.8	6.3	6.2	14.8	17.7	18.2	17.3
2. どちらとも	9.0	9.2	10.5	11.3	18.4	16.4	18.2	20.8
3. そうである	86.1	84.0	83.2	82.6	66.8	65.9	63.6	61.9
N=	1292	566	649	390	1443	621	559	370

  

②きまりが守られている	小学校				中学校			
	【全体】	【見】	【いじ】	【いじ】	【全体】	【見】	【いじ】	【いじ】
1. そうでない	27.3	32.3	30.8	28.9	37.2	43.1	40.2	43.3
2. どちらとも	30.6	28.6	27.7	27.2	42.1	37.9	41.0	40.4
3. そうである	42.1	39.1	41.5	43.9	20.7	19.0	18.8	16.2
N=	1292	566	649	390	1443	620	559	369

があると言える。

表6の「私のクラスは楽しい」では、いじめ体験者でも、小学校の8割以上と、中学校の6割以上の子どもが「楽しい」と回答しており、学級の楽しさといじめとは関わりがないと言える。10年前は、小・中学校共に約6割で、現在より低い。子どもたちの「楽しさの質」はかなり異なっていると思われる。また、現在の子どもの「きまり」を遵守しない傾向があるが、いじめのある学級だから特に「きまりが守られていない」という傾向はない。「協力体制」「友だちの話を聞く」「学習中の熱心さ」「先生との会話」等でも、いじめのある学級だけ

ら「そうである」の割合が低いということはなく、現在のいじめはどんな学級集団でも発生する可能性があると考えられる。

○いじめの発生時期は、現在も10年前も、小・中学校共に4月(26.2%)と9月(21.4%)に集中している。小学校6年生(40.1%)、中学校2(31.0%)・3年生(28.3%)は特に4月が多い。

○いじめの継続期間は、現在も10年前も、「今も続いている」が約50%で最も多いが、現在の中学校2年生は61.6%に達している。次に多いのが「一回だけ(18.8%)」である。いじめの半数が今も続いているということは、いじめが解消の方向には向かっていないということでもあろう。

○いじめの行われている場所は、約80%が教室で、約30%が廊下や階段である。校庭は小学校4年生15.6%、6年生11.1%、中学校2年生4.2%というように、学年が低いほど多い。

○いじめの行われている時間帯は、「授業の間の休み時

間(45.5%)」「昼休み(37.6%)」が最も多い。特に、中学校では「授業の間の休み時間」が50%を越えている。教師の目の届きにくい時間帯である。

○いじめていた人の数は、1人(現=20.4%、10年前=14.4%)、2~5人(現=57.4%、10年前=47.7%)、6~9人(現=9.1%、10年前=16.0%)、10人以上(現=13.1%、10年前=21.9%)で、現在は単独化と小集団化の傾向があると言える。

○いじめられていた人の数は、現在も10年前も約50%が1人である。2~5人の小集団が単独の個人をいじめているのが、現在も10年前も変わらないいじめの構図である。この傾向は学年が進むにつれて顕著になる。

○教師が学級学年で起きているいじめを知っているかどうかということについては、「知っている」「分からない」「知らない」の割合がほぼ3分の1ずつの割合であるが、学年が進むにつれて「知らない」が増加している。10年前は、中学校2年生以外は現在より「知っている」の割合が5~15%の幅が多い。

### 3. いじめ体験を探る

#### (1) いじめられた体験

表7 態様別のいじめられた体験(校種性別)

【いじめの態様】	1996年(現在) %					1985年(10年前) %					
	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	
1. たいたり、けったりする	19.5	25.1	18.2	27.7	6.9	21.9	26.5	21.9	29.9	10.0	
2. かみの毛をひっぱり体をつねったりする	2.8	2.3	3.6	3.0	2.4	3.0	4.6	3.6	2.7	1.0	
3. 水やどろをかけたり石などをなげついたりする	1.5	2.6	1.3	1.9	0.0	2.2	0.9	2.2	4.2	1.7	
4. かさ、ほうき、鉛筆などでつついたりする	1.7	2.9	1.3	1.5	0.7	3.5	4.9	0.8	7.2	1.4	
5. 無理やり「プロレスごっこ」をする	1.7	2.3	1.0	3.7	0.0	—	—	—	—	—	
6. 言葉でおどしたり、悪口を言ったりする	15.6	16.4	16.2	11.6	17.9	11.8	13.4	14.6	11.0	8.3	
7. ひやかしたり、からかったりする	8.5	6.4	10.1	9.0	8.6	13.2	9.5	12.0	12.5	18.3	
8. 物をとったり、かくしたり、汚したりする	8.7	8.8	8.8	10.1	7.2	8.6	7.4	9.9	11.7	5.5	
9. 無視したり、仲間外れにしたりする	22.7	13.2	25.0	12.0	41.6	23.2	13.4	22.6	11.4	44.3	
10. でたらめなうわさを言いふらす	8.4	7.9	6.8	8.2	10.7	7.8	12.7	7.7	4.2	6.6	
11. 無理やりいやがることをする(服を脱がす等)	3.1	5.0	1.9	3.4	2.1	2.7	4.6	1.8	2.3	2.1	
12. お金やものを取り上げる	1.5	2.0	1.0	1.9	1.0	1.6	2.1	2.2	1.9	0.4	
13. ぬすみをさせる	0.8	1.2	1.0	0.7	0.3	0.5	0.0	0.7	1.0	0.4	
14. 使い走りさせる(無理に用事を言いつける)	1.7	1.5	1.6	3.4	0.3	—	—	—	—	—	
15. わざとらしくていねいな言葉を使う	1.7	2.3	2.3	1.9	0.3	—	—	—	—	—	
※いじめられた体験者=1209(44.2%)	N=	1209	342	308	267	291	1110	283	274	264	289
		(44.2%)	(49.9%)	(50.7%)	(36.9%)	(40.5%)	(34.2%)	(34.9%)	(36.0%)	(30.9%)	(35.1%)

表7は態様別のいじめられた体験である。いじめられた体験者は全体の44.2%で、10年前より10%多い。3節

表8 いじめられた時の対応(校種性別)

	1996年(現在) %					1985年(10年前) %					
	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	
1. 「しかえし」をした	30.3	37.0	28.8	36.4	18.8	21.4	32.2	19.3	24.2	10.4	
2. 相手にやめるように言った	30.3	36.4	34.6	28.4	20.5	—	—	—	—	—	
3. 先生に話した	12.4	13.3	15.7	8.0	12.2	11.6	11.3	17.2	4.9	12.8	
4. 親に話した	16.2	10.4	26.5	6.4	21.2	15.9	11.7	27.0	7.2	17.3	
5. 友だちに話した	29.6	15.7	40.2	14.4	48.6	21.8	18.0	33.6	4.9	29.8	
6. 日記や文章に書いた	4.0	1.5	5.9	2.7	6.3	—	—	—	—	—	
7. 電話相談をした	0.9	0.6	1.3	1.1	0.7	—	—	—	—	—	
8. 学校を休んだ( )日ぐらい	2.3	1.8	2.0	1.1	4.2	2.8	1.4	3.6	2.7	3.5	
9. 何もしなかった(我慢した)	28.4	26.0	24.2	37.9	26.7	55.9	53.7	76.3	50.4	43.9	
10. その他	7.3	7.1	6.5	8.0	7.6	4.2	6.7	4.0	2.7	3.5	
	N=	1197	338	306	264	288	1110	283	274	264	289

の学級・学年で起きているいじめの態様の割合と似た傾向であるが、10年前と比較すると、中学校女子のいじめられた態様が「ひやかし・からかい(現=8.6%、10年

前=18.3%)」からより過激で積極的な態様である「言葉のおどし・悪口(現=17.9%、10年前=8.3%)」へと変化していることが分かる。

前ページの表8は「いじめられた時にどうしたか」の結果であるが、「しかえしをした」「相手に止めるように言った」「友だちに話した」等のいじめられたことへの反撃行動や積極的な対応が目立つ。しかし、10年前は「何もしなかった（我慢した）」が55.9%で、この当時子どもたちがいじめに対してじっと我慢していたことが分かる。現在は反撃行動も多く、いじめられていた者がいじめる側になり、いじめていた者がいじめられる側に変化するという「いじめの立場の変化」の現象が明らか

かに出てきている。また「相手に止めるように言った」は中学校より小学校に多く、小学校の方がいじめを阻止できる可能性の高いことを示している。「先生・親に話した」は女子に多い対応であるが、「友だちに話した」になると、女子は男子より21.5～34.2%も多くなる。反撃・阻止行動にも出られず、人にも話せず、じっと我慢している中学校男子（37.9%）の姿が見える。学校を休んだ子どもも2.3%（27人）おり、不登校の増加が全国的に続いている現在、いじめ絡みの不登校の増加も懸念される。

## (2) いじめた体験

表9 いじめた体験の比較（校種性別）

今回の調査では27.8%がいじめた体験を持っていた。現在と10年前のいじめた時の気持ちの割合の差は5%以内であり、いじめた体験についての大きな差はない。4割ほどの子どもは「かわいそうになった」という相手への憐憫の情を持っている。しかし、「いやな気持ちになった」「もう二度とやるまい」の後悔する気持ちは、現在で73.9%、10年前で81.6%と、10年前の方が若干多い。また、「スッキリした」「これからもいじめる」のいじめたことを肯定的に捉えている子どもは、現在で17.1%、10年前で12.1%と、現在の方が5%多い。若干の差であるが、10年前より、いじめた体験者の反省や後悔の気持ちが後退していることは明らかである。	1996年(現在) %					1985年(10年前) %				
	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】
1. 気持ちがスッキリとした	13.9	10.5	12.0	17.5	16.7	9.6	9.6	10.0	11.4	7.7
2. これからもいじめてやろう	3.2	1.2	3.5	4.5	4.2	2.5	0.3	2.9	4.3	2.0
3. なんだかかわいそうになった	37.4	36.3	34.5	40.0	38.7	37.0	38.2	39.4	36.0	35.4
4. いやな気持ちになった	21.2	25.4	23.9	15.5	18.5	26.2	24.5	20.3	28.5	29.2
5. もう二度とやるまいと思った	15.3	21.4	16.9	10.0	11.3	18.4	20.4	20.3	15.2	18.7
6. その他	9.1	5.2	9.2	12.5	10.6	6.3	7.0	7.1	4.6	7.0
N=	760	248	142	200	168	1325	314	241	369	401
	(27.8)	(36.2)	(23.4)	(27.6)	(23.4)	(※10年前は複数選択・100%として計算)				

表10 人をいじめたくなる自分の理由（3つ以内選択・校種性別）

【自分の理由】	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】
1. 何となくいらいらする	38.4	31.2	34.1	48.5	38.2
2. いじめられたしかえしをしたい	26.8	38.8	31.4	21.8	17.3
3. お金や物がほしい	3.3	3.0	2.5	4.7	2.6
4. 嫌なことがあり気持ちがすっきりしない	27.4	23.3	25.0	32.0	28.6
5. 勉強がおもしろくない	4.3	3.4	2.7	7.1	3.7
6. 家がおもしろくない	5.7	3.3	2.4	7.4	8.7
7. 自分の強さを見せたい	6.3	4.9	5.8	8.7	5.3
8. ふざけたり遊んだりしたい	17.6	21.2	13.1	25.8	10.0
9. 仲間になりたい	3.5	5.6	4.4	2.9	1.6
10. 一緒にいじめないといじめられる	13.8	6.9	10.0	12.1	24.7
11. 友だちとうまくいかない	14.0	17.7	20.1	7.1	12.3
12. 相手のことがきらい	52.9	41.9	49.5	49.6	69.0
N=	2522	609	551	678	681

・3年男子では50%を越えており、ストレスからいじめに走るのは中学校男子に多いと言える。第3位は「気持ちがすっきりしない」で、この理由も中学校男子に多い理由である。「しかえしをしたい」は小学校男子に多い理由で、特に小学校4年男子では46.8%に達している。この理由は学年が進むにつれ減少している。現在の子どもたちは、感覚的生理的な理由から、ストレスの解消という理由から、またいじめられた仕返しという理由から「いじめ行為」に出ると言える。

## 4. いじめられた体験といじめた体験の比較

### (1) いじめ体験者の個人の特徴

次ページの表11の「からだつき」を比較すると、いじめられた体験者といじめた体験者の差は5%以下で、身体の大きさはいじめとは関係ないと言える。身体が小さいからいじめられるという結果は出ていない。勉強では「嫌いな方」の子どもにいじめられた体験者が多く、い

じめた体験者では「好きな方」の約5倍になっている。勉強の嫌いな子どもはいじめに関係する割合が好きな子どもの2～5倍にもなることが分かる。(P<.05) また、いじめに関係する子どもには運動の好きな者が多く、行動の活発な者が3人に1人の割合である。そして、97%以上に仲のよい友だちがいるという状況の中で、現在のいじめは発生している。転校体験についても、全体が

23.0%で、いじめ体験者も約24%と差はなく、あらゆる条件の子どもがいじめに関わる可能性があると言える。いじめ体験者の目立つ特徴もない。

(2) いじめ体験者のいじめに対する判断

表12はいじめ体験者の態様別のいじめへの判断を比較している。両者の差は全ての態様で5%以下であり、いじめへの判断ということではほぼ同じ意識を持っている。いじめられた体験があるからといって、「いじめだ」という認識が強くなる

表11 いじめ体験者の個人の属性

		[大きい方]	[ふつう]	[小さい方]	
①からだつきは	「いじめられた体験者」	29.1%	47.5%	23.4%	N=1208
	「いじめた体験者」	27.9%	51.1%	20.9%	N= 759
②勉強は	「いじめられた体験者」	12.1%	59.2%	28.7%	N=1208
	「いじめた体験者」	7.5%	57.4%	35.1%	N= 760
③運動は	「いじめられた体験者」	54.1%	36.2%	9.7%	N=1209
	「いじめた体験者」	61.3%	32.1%	6.6%	N= 760

表12 いじめ体験者のいじめに対する判断

【いじめられた体験のある子ども】 ＜いじめへの判断＞	【いじめた体験のある子ども】 ＜いじめへの判断＞		
	「いじめた態様」	「いじめた」	「いじめた」
1. たたいたり、けったりする	14.2%	67.4%	18.4%
2. かみの毛をひっぱったり体をつねったりする	18.7%	50.0%	31.2%
3. 水やどろをかけたり石などをなげつけたりする	33.7%	32.2%	34.1%
4. かさ、ほうき、鉛筆などでつついたりする	22.2%	44.3%	33.5%
5. 無理やり「プロレスごっこ」をする	12.4%	37.1%	50.5%
6. 言葉でおどしたり、悪口を言ったりする	42.3%	35.1%	22.6%
7. ひやかしたり、からかったりする	22.0%	58.4%	19.6%
8. 物をとったり、かくしたり、汚したりする	40.1%	36.3%	23.6%
9. 無視したり、仲間はずれにしたりする	61.6%	16.4%	21.9%
10. でたらめなうわさを言いふらす	29.4%	37.7%	32.9%
11. 無理やりいやがることをする	40.3%	29.3%	30.4%
12. お金やものを取り上げる	60.3%	8.9%	30.8%
13. ぬすみをさせる	53.9%	11.5%	34.6%
14. 使い走りさせる（無理に用事を言いつける）	44.4%	18.8%	36.8%
15. わざとらしくていねいな言葉を使う	10.1%	48.7%	41.3%

訳ではない。「いじめの立場の変化」の現象であろう。この傾向は調査対象者全体とも酷似しており、意識の類似性はだれもがいじめ体験を持つ可能性のあることを示唆している。

表13 いじめ体験者のいじめがあった時の行動

「行動のタイプ」	いじめられた体験者 N=1200					いじめた体験者 N= 753				
	全体	小学	中学	男子	女子	全体	小学	中学	男子	女子
1. いっしょになっていじめる	1.2	0.8	1.6	1.3	1.0	4.3	2.3	6.3	4.1	4.5
2. おもしろがって見ている（観衆）	4.3	1.5	7.4	6.4	2.0	9.0	2.8	15.5	12.6	3.6
3. 見ても知らんぷりする（傍観者）	27.3	15.4	41.1	29.4	24.9	29.6	17.9	42.0	29.3	30.0
4. すぐ先生に知らせる	32.2	38.6	25.0	25.6	39.2	24.2	33.9	13.9	17.3	34.2
5. とめに入る	35.0	43.7	24.8	37.2	32.8	32.9	43.1	22.3	36.7	27.7

(3) いじめ体験者のいじめがあった時の行動

表13からは、「傍観者」と「とめに入る」子どもの割合が「いじめられた」「いじめた」の体験別で大きな差のないことが分かる。しかし、小・中学校別での差は大きく、傍観者は圧倒的に中学校が多く、とめに入る子どもは小学校の方が20%ほど多い。いじめを助長するタイプの「いじめる」と「観衆」の子どもは、いじめた体験者がいじめられた体験者の倍以上であり、特に小学校男子と中学生では20%前後になる。また、「先生に知らせる」行動でもいじめられた体験者の方が8%多い。いじめた体験者は、いじめを助長する傾向がいじめられた体験者より強いと言える。

(4) いじめ体験者のいじめについての考え

表14をみると、いじめを肯定する考えはいじめた体験者がいじめられた体験者のほぼ倍で、中学生と男子に多い。「理由によっては」の考えも、いじめた体験

者の方が全体で9.0%、中学校で11.0%、女子で14.4%多い。「絶対許せない」では、いじめられた体験者の方が全体でも16.2%多くなる。いじめられた体験者にはいじめをなくそうとする意識が強いため、「いじめをなくす」ためにはいじめの加害者への指導・支援がより重要だと言える。

表14 いじめ体験者のいじめについての考え

「いじめについてどう思いますか」	いじめ体験者					
	【いじめについての考え】	全体	小学	中学	男子	女子
1. いじめられる方がいけないのだから当たり前だ	いじめられた体験者	2.6	2.0	3.2	3.6	1.5
	いじめた体験者	6.3	3.6	9.0	7.7	4.2
2. ふざけ半分なのだからたいたことではない	いじめられた体験者	2.5	2.6	2.4	4.0	1.0
	いじめた体験者	5.7	6.0	5.4	7.7	2.9
3. 理由によってはいつも悪いとは言えない	いじめられた体験者	37.5	32.0	43.8	36.0	39.1
	いじめた体験者	46.8	39.2	54.8	42.2	53.5
4. どんなわけがあっても絶対に許してはいけない	いじめられた体験者	57.4	63.4	50.6	58.4	58.4
	いじめた体験者	41.2	51.2	30.8	42.4	39.4

## 5. いじめへの対応5タイプを探る

### (1) いじめへの対応5タイプ

表14 いじめへの対応5タイプ (校種性別・学年別)

【校種・男女別】	1996年(現在) %					1985年(10年前) %				
	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】
1. 一緒になっていじめる (加害者)	1.3	0.6	0.8	2.5	1.3	2.6	2.3	1.1	4.6	2.1
2. おもしろがって見ている (観衆)	4.8	2.1	1.3	12.8	2.3	11.5	10.3	3.7	20.2	10.6
3. 見ても知らんぷりをする (傍観者)	29.4	18.6	11.5	42.6	41.4	31.1	17.0	17.2	38.1	50.2
4. すぐ先生に知らせる (通報者)	32.0	32.0	52.5	16.4	30.6	23.5	26.9	44.8	9.2	15.9
5. とめに入る (調停者)	32.5	46.7	33.9	25.7	24.5	31.3	43.5	33.2	27.9	21.2
N=	2705	679	601	719	703	3039	758	699	817	765

  

【学年別】	1996年(現在) %			1985年(10年前) %		
	【小4】	【小5】	【小6】	【中1】	【中2】	【中3】
1. 加害者	0.5	0.9	0.7	2.5	2.8	0.4
2. 観衆	1.0	1.3	2.9	8.2	9.0	5.9
3. 傍観者	8.9	13.7	23.5	33.9	43.3	49.0
4. 通報者	51.0	39.1	34.9	26.6	24.7	18.8
5. 調停者	38.6	45.0	38.0	28.9	20.3	25.9
N=	414	453	413	478	469	478

表16からは、調停者が小学校男子に多く、学年別でも小学校が38～45%を占めているのに対し、中学校では20%台と低いことが分かる。通報者は小学校女子に多いが、学年が進むにつれて減少している。小学校では調停者と通報者が82.3%であるが、中学校では48.5%と少ない。反面、傍観者では小学校の10%台に対して、中学校では男女とも40%を超える。中学校では、友だちがいじめられているのを見ても、関係ないと考える子どもが61.0% (小学校=43.6%) いる。観衆と加害者についても、中学校男子が多く、中学校でのいじめ対応の難しさが考えられる。しかし、10年前と比べると、加害者と観衆が減少し、通報者が大きく増加している。子どもたちが教師を頼ろうとする現れだと思いが、いじめが教師の手でなければ解決できないということを示していると思われる。

### (2) 対応5タイプと学級の雰囲気

小学校ではタイプに関わらず、75%以上の子どもが「クラスが楽しい」と回答している。いじめが遊び感覚で捉えられていることを考慮すると、教師の考えている楽しさとは大きな隔たりがあると思われる。中学校ではいじめをなくそうとする者ほど「楽しい」の割合が高く、楽しいクラスには調停者や通報者がより多く存在すると思われる。きまりについても、守られているクラスには調停者や通報者がより多くいると言える。「協力体制」「話をよく聞く」「学習中の熱心さ」「先生との会話」等についても、同様のことが該当する。楽しいクラス、きまりの守られているクラス、協力できるクラス等には、調停者や通報者のタイプの子どもが多くおり「いじめをなくす」よりよい環境があると言える。

### (3) 対応5タイプといじめを見た時の行動

表16は、いじめへの対応のタイプと友だちがいじめられているのを見た時の意識との一致を表している。小・

表15 対応5タイプと学級の雰囲気

①わたしのクラスは楽しい	【小学校】 (P<.01)			【中学校】 (P<.01)		
	【小学校】 (P<.01)			【中学校】 (P<.01)		
	【小学校】 (P<.01)			【中学校】 (P<.01)		
	【小学校】 (P<.01)			【中学校】 (P<.01)		
1. 加害者	0.0	0.0	100.0	33.3	18.5	48.1
2. 観衆	4.5	0.0	95.5	19.2	19.3	61.5
3. 傍観者	10.2	13.3	76.5	16.2	20.7	63.1
4. 通報者	3.8	8.5	87.8	11.8	18.1	70.1
5. 調停者	4.2	8.6	87.2	12.3	14.6	73.1
N=	63	116	1100	210	262	951

  

②きまりが守られている	【小学校】 (P<.01)			【中学校】 (P<.01)		
	【小学校】 (P<.01)			【中学校】 (P<.01)		
	【小学校】 (P<.01)			【中学校】 (P<.01)		
	【小学校】 (P<.01)			【中学校】 (P<.01)		
1. 加害者	44.4	44.4	11.2	51.8	33.4	14.8
2. 観衆	45.5	27.3	27.2	39.4	37.6	23.0
3. 傍観者	33.2	37.2	29.6	38.0	43.0	19.0
4. 通報者	26.0	29.4	44.6	35.4	42.0	22.6
5. 調停者	25.3	29.2	45.5	34.9	43.5	21.6
N=	349	391	539	525	601	295

表16 対応5タイプといじめを見た時の行動

	【小学校】 (P<.01)		【中学校】 (P<.01)	
	【小学校】 (P<.01)		【中学校】 (P<.01)	
	【小学校】 (P<.01)		【中学校】 (P<.01)	
	【小学校】 (P<.01)		【中学校】 (P<.01)	
1. 加害者	44.4	55.6	30.8	69.2
2. 観衆	22.7	77.3	12.4	87.6
3. 傍観者	16.8	83.2	11.1	88.9
4. 通報者	64.9	35.1	44.7	55.3
5. 調停者	77.4	22.6	66.9	33.1
N=	757	467	470	932
	(61.8%)	(38.2%)	(33.5%)	(66.5%)

中学校共に、調停者は「何かをする」という意識が強くあり、通報者にもそれが認められる。しかし、加害者・観衆・傍観者の立場の子どもは「何もしない」という意識が強い。特に、傍観者にはこの意識が強く、小学校でも80%を超え、中学校では約90%に達している。(1)で述べた通り、この傍観者が40%を超える中学校では傍観者への指導・支援がいじめをなくす上での大きな課題となる。

### (4) 対応5タイプといじめについての考え

次ページの表17は対応5タイプのいじめについての考えである。加害者、観衆、傍観者は「理由によっては、悪いとは言えない」が40～50%で、いじめを肯定し助長する行動の背景には条件付きでいじめを認めようとする

表17 対応5タイプといじめについての考え

【いじめについての考え】	【小学校】(P<.01)					【中学校】(P<.01) %						
	(加害者・観衆・傍観者・通報者・調停者) N=人					(加害者・観衆・傍観者・通報者・調停者) N=人						
1. 相手も悪いから、あたりまえだ	11.2	4.5	3.1	1.5	1.4%	23	30.8	13.8	2.7	1.2	0.8%	46
2. ふざけだから、たいしたことでない	22.2	18.3	4.1	2.8	1.9	39	11.5	14.7	3.5	0.9	1.1	47
3. 理由によっては、悪いとは言えない	44.4	54.5	45.4	27.8	30.0	406	46.2	56.9	50.8	30.4	44.5	636
4. 理由があっても、絶対に許せない	22.2	22.7	47.4	67.9	66.7	801	11.5	14.7	43.0	67.5	53.5	690
N=	9	22	196	526	516	1269	26	109	597	332	355	1419

考えのあることが分かる。そして、通報者と調停者は70%近い割合で「絶対に許せない」(中学校の調停者=53.5%)の考えを選択しており、(3)の行動にも見られた通り、「いじめは絶対に許せない」という考えに基づき行動していることは明らかである。しかし、中学校では調

停者でさえも44.5%が「理由によっては悪いとは言えない」を選択しており、加害者と観衆の「相手も悪いから当たり前だ」という割合からすると、いじめをなくすための指導・支援では子どもたちのいじめに対する意識変革が極めて重要な課題となろう。

## 6. いじめをなくすための課題を探る

表18 いじめが起きた時に教師にしてほしいこと

	1996年(現在) %					1985年(10年前・複数回答) %				
	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	【全体】	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】
1. 気がついて知らないふりをする	4.8	3.8	1.8	7.5	5.6	3.2	2.4	2.2	3.5	4.1
2. その場で両方を叱って止めさせる	43.6	44.1	40.5	39.6	49.6	31.1	39.2	38.4	22.4	27.1
3. いじめた方だけをきびしく叱る	20.1	23.1	18.2	22.7	16.2	29.4	18.4	13.8	43.5	37.1
4. 両方の家に連絡をして、いじめをなくす	31.5	29.0	39.5	30.2	28.6	36.3	40.0	45.6	30.6	31.7
N=	2716	683	602	719	709	4351	991	977	1230	1153

表18からは、「その場で両方を叱って止めさせる」という対症療法的な指導が一番多く要望されていることが分かる。中学校女子では男子より10%高く、半数の子どもがその場でのいじめが解決すればよいと考えている。いじめの継続性や反復性は意識されていない。10年前はこの選択は現在より少なく、中学校では「いじめた方だけをきびしく叱る」が40%前後あった。しかし、この対応は現在の子

表19 いじめをなくすために、教師や学校が行う必要のあること

	%【全体】				
	【小男】	【小女】	【中男】	【中女】	
1. 学校全体でアンケートをとって調べる	30.3	35.8	32.1	29.8	24.0
2. 先生たちで話し合いをし全員の先生方で協力する	39.3	42.3	36.1	40.9	37.6
3. 学級活動などで「いじめ」の話し合いをする	35.2	44.6	44.0	26.1	27.8
4. 「いじめ」などを専門に考える先生を置く	18.4	16.0	10.3	25.1	20.6
5. 「いじめ」についてのポスターや作文を書かせる	17.6	26.0	21.2	13.0	11.2
6. いつでも先生に相談できるようにする	53.6	46.3	57.1	49.7	61.6
7. 代表委員会、生徒会などで話し合えるようにする	15.9	23.5	17.2	15.5	8.1
8. 「いじめ」のビデオや作文などを授業で取り上げる	20.3	20.0	18.9	17.9	24.0
9. 朝の会や帰りの会(学活)で取り上げる	10.0	12.5	7.9	12.0	7.0
10. 子どもたちの中から子ども相談員をつくる	30.2	26.4	31.5	24.4	38.8
11. 学年・学級だより、学校だよりなどに書く	21.8	30.5	31.1	15.5	11.6
12. 保護者会などで話し合う	23.8	19.5	23.7	26.5	25.4
13. 朝会の時に話をする	11.3	17.8	14.9	8.8	4.6
14. 「いじめ」があったらしく知らせる	38.4	37.2	38.1	41.7	36.6
15. その他	6.8	3.2	3.3	10.5	10.0
N=	2715	681	604	714	713

どもからは望まれていない。「いじめられる人にも悪いところがある(36.2%)」の考えもあり、いじめた方だけを一方的に叱ることは支持できないと考えている。「両方の家に連絡をしていじめをなくす」は3分の1ほどの選択であるが、「絶対に許せない(65.6%)」という考えを強く持っている小学校女子は39.5%が一番多く、教師に徹底した対応を望んでいることが分かる。10年前の子どもはこうした対応をより強く望んでいた。そして、対症療法的な指導では真の解決にはならないことを一番よく知っているのは教師自身であろう。

表19の内容は いじめをなくすために、子どもが考えうる教師と学校への課題を表している。「いつでも先生に相談」が半数を越え。第1位である。「先生たちで話し合い全員で協力」「いじめがあったらしく知らせる」がそれに続き約40%を占めている。この上位3位の

内容はいずれも教師と教師集団の行うことである。子どもたちは担任と気楽に話ができているが、困ったことや悩み等を相談できない状況にあることを訴えており、教師集団が共通理解のもとに一丸となった対応をしていないように見えることを意思表示している。また、いじめについての情報を知らせしてほしいと望んでいる。特に「いつでも先生に相談」は女子に多く、無視・仲間はずれ等の人間関係の悩みが多いことを考えると、友だちだけでなく教師にも相談を求めるのが理解できよう。「子ども相談員」の設置が女子に多いのも、いじめられた時の対応で「友だちに話す」が多かったことに通じる。小学校では「学級会で話し合い」もほぼ3人に1人の選択があり、話し合いでいじめを解消しようとする意欲もある。中学校ではほぼ4人に1人が「保護者会等で話し合う」を上げており、いじめをなくすためには保護者との

協力も必要であることを語っている。

また、子ども自身の行動としては、全体の48.0%の子どもが「みんなで注意する」を選択しており、中学校では50%を超える。小学校4・5年生は「一人でも注意する」が50%近くあり、いじめを見た時の行動にも示された正義感の強さが表れている。「先生に報告する」は小学校女子が一番多い(43.4%)が、子どもたちに共通しているのは「みんなで注意する」であり、集団の力を生かした効果に気がついているようにも思われる。

## 7.子どもたちの声

自由記述の子どもの声を聞くと、最も多いのが「許せない。相手を思いやる気持ちに欠ける(22.5%)」であり、相手の人権の尊重を大切にしようとする子どもたちの存在が認められる。同じ「許せない」でも「強く罰すべきだ」という強硬論が次に多く(14.3%)、いじめが死に繋がることを考慮した声(8.9%)もある。10年前の声と比較すると、10年前は「いじめられる側」の原因や責任が追求されていたが、現在は「いじめる側」の理由や正当性が主張されている。いじめの遊戯化に象徴されるように、この10年間で子どもたちのいじめへの意識が変化してきていると言える。

## IV まとめと今後の課題

1～7までの項目の分析・考察で明らかになったいじめの実態の特徴を整理し、「いじめをなくす」ための課題と対応につながる提言をまとめたいと思う。

### 1.本市の「いじめ」の特徴

- 小学校男女の8割以上に「たたいりけったり」の体験があり、「遊びだ」の意識が7割前後に達していることから、この態様は日常化していると言える。中学校男子にも同様の傾向があり、「遊びだ」の意識は10年前の調査結果のほぼ倍の割合を示している。
- 「言葉のおどし、悪口」は、いじめの態様順位では第3位で、やった体験者も60～70%に達する。遊び感覚の者が40%前後おり、日常化している態様である。
- 「たたいりけったり、冷やかす・からかい」は10年前より減少しているが、「無視・仲間はずれ、物をとったり隠したり」は増加し、陰湿化が進んでいる。
- 「無視・仲間はずれ」は、いじめられた体験者の態様別順位では第1位であり、「いじめだ」という意識がありながら、女子の間では多発している。
- 「お金や物を取り上げる」は、被害者は17%以下と少ないが、「いじめだ」の意識も45～70%と、10年前の中学生の85～94%より低い。「ぬすみをさせる」も同様で、いじめ行為としては捉えられていない。
- 自分の学級・学年でいじめを目撃した子どもは全体の43.4%いる。10年前より12.9%多くなっており、明ら

かにいじめの発生は10年前より増えている。

- いじめがあるからといって、「クラスが楽しくない」「きまりが守られていない」等ということはない。いじめはどんな学級集団でも発生する可能性がある。
- いじめの発生時期は4月(26.2%)と9月(21.4%)が多い。継続期間では、「今も続いている」が49.4%を占めている。中学2年が61.6%と最高である。行われている場所は、78.6%がクラスの教室で、29.5%が廊下や階段である。時間帯は、授業の間の休み時間が45.5%、昼休みが37.6%と集中している。
- いじめていた人の数は、2～5人が約60%、1人が約20%、6人以上が約20%である。10年前は6人以上が約40%で、1人は約14%であった。いじめられていた人の数は、10年前と同様、約50%が1人である。
- いじめられた体験者は全体の44.2%で、10年前より10%多くなっている。
- いじめられた時の対応は、「何もしなかった(我慢した)」子どもが約30%であるが、10年前は55.9%であった。「しかえし」の反撃行動は女子と中学校男子が10年前より10%増加し、中学校女子は約50%である。
- いじめられた時の気持ちは、10年前と似た傾向であるが、「相手がにくらなくなった」が13%増加し、いじめられた時の相手への憎しみが増大している。
- いじめた体験者は全体の27.8%おり、後悔する気持ちが約74%で、肯定する気持ちは約17%である。10年前より肯定する気持ちが5%ほど増加している。
- いじめた体験者は小学校男子が36.2%で一番多い。中学校男子が27.6%、小・中学校女子は23.4%である。
- 人をいじめたくなる自分自身の理由は、1位「相手のことが嫌い(52.9%)」、2位「何となくいらいらする(38.4%)」であり、「しかえし(26.8%)」は4位である。相手の理由は、1位「自分かってでわがまま(38.2%)」、2位「なまいきだ(34.7%)」で、「見てるといらいらする(26.5%)」が4位である。
- いじめられた体験者の35.2%がいじめた体験を持ち、いじめた体験者の56.1%がいじめられた体験を持っている。これは「いじめの立場の変化」の現象を表しており、現在のいじめの特徴的な構造である。両者の人をいじめたくなる理由も酷似している。
- 人をいじめたことに対する後悔や反省の気持ちが強いほど、援助しようとする気持ちも強い。
- いじめを見たら、とめに入る(調停者)という正義感の強い子どもは10年前と同じくほぼ3分の1いる。

### 2.「いじめをなくす」ための課題と対応

- 子ども個人の属性では、いじめとの関わりが明らかになったのは「勉強」(P<.02)だけであった。勉強の嫌

いな子どもの気持ちを共感的に捉える必要があり、意欲を持って主体的に学習に取り組めるような個別の支援を工夫し、そうした学級集団の雰囲気子どもと共につくっていくことが重要である。

- 身体の小さい子や体力のない子がいじめられやすいという考えは当てはまらない。いじめ体験者には運動が好きで行動の活発な子どもが多く、運動が苦手というイメージの子は少ない。いじめはどんな子どもにも襲いかかる可能性があるという認識を持つべきである。
- いじめ体験者の97%に仲のよい友だちがいる。友だちの有無ではなく、友だち同士の間関係がいじめの原因になっている。子どもたちの友人関係や人間関係の様子を把握することが大切である。
- 楽しいと思われている学級でいじめが発生している。教師の考えている楽しさと子どもの考えている楽しさのどこが違うのかを改めて問い直す必要がある。
- いじめ体験者の学級が特に「きまりの守られていない学級」とは言えない。子どもたちが自分たちの集団を動かしていくには、主体的に考えたきまりを設定する必要がある。子どもたちの主体性という視点で改めて見直してみることも重要であろう。
- 「自分の学級には、いじめはあり得ない」と考えるのは危険で、「どんな学級でも、いつでもいじめは発生する」という認識を持つ必要がある。
- 子どもたちのほぼ半数がストレスを訴えており、いじめ体験者（約65%）ではそれがより強いという実態を学校教育全体の中で捉えていく必要がある。学校ストレスの問題は新たな課題でもある。
- 子どもたちは、どのような行為が「いじめ」になるのかを認識していない場合が多い。一つ一つの態様がなぜいじめになるのかを具体的に指導する必要がある。
- いじめられた体験者には相手への憎しみだけでなく、悲しく辛い思いも強い。また、いじめた体験者には後悔や反省の気持ちもある。いじめ体験者のこうした心の内部を理解するような支援の工夫が望まれる。
- いじめへの対応5タイプでは、10年前と比べると「通報者」の増加が大きい。通報者は教師を頼っているのであるから、それにどう応えるかが大切である。
- 傍観者にはかかわりを恐れ、行動できない子どもが多いが、半数は「絶対許せない」と考えている。この子どもたちにみんなと協力して行動することの素晴らしさを指導できれば、いじめの解決は大きく前進する。
- 教師が現象面の解消だけに甘んじたら、再発の可能性は極めて高い。保護者も交えて、子どもの生活のあり方を見直し、人間関係の改善にまで手をつけなければ「いじめをなくす」ことは難しい。
- 「いじめをなくす」手立てとして、半数以上の子ども

が「いつでも先生に話したり相談できるようにする」を選択している。子どもたちは何よりも教師を求めている。子どもたちのこの真剣な要求に対して、教師と教師集団がどう応えるかが、最大の課題である。

- 子どもたちは「先生たちで話し合いをし、全員で協力する」ことを要求している。様々な問題に対して全職員で十分な話し合いをし、共通理解のもとに、具体的な実践目標を設定して共通実践していくのが課題解決のための基本的な方策である。

### 3. 今後の課題

この研究の主たるねらいは本市のいじめの実態を明らかにすることであり、具体的な指導・支援の方法を提示することではない。そのため、「いじめをなくす」ための対応については、基本的な事項にのみに限定せざるを得なかった。各教師と学校には、今回の研究で明らかになった本市の児童生徒のいじめの実態を参考に、「いじめをなくす」実践を積み上げてほしいと思う。「いじめをなくす」ための具体的な手立ての研究は、今後早急に取り組む必要のある人権尊重教育上の課題である。

### おわりに

市内の児童生徒のサンプルを提供して下さった各学校と研究の当初より指導・助言をして下さった横浜国立大学の岡田守弘教授には、この研究をまとめることで感謝の気持ちを表したい。

・先行研究

川崎市総合教育センター児童・生徒指導研究員会『小・中学校の学校生活ーいじめの実態についての意識調査』

1985年

東京都立研究所『「いじめ問題」研究報告書ーいじめ解決の方策を求めてー』

1995年

・参考文献

ソニア・シャープ／ピータ・K・スミス共著 東洋館出版『あなたの学校のいじめ解消にむけて』

1996年

文部省『児童生徒のいじめ等に関するアンケート調査結果』

1996年

・指導助言者

横浜国立大学教授

岡田 守弘

(川崎市総合教育センター専門員)

川崎市立登戸小学校校長

鈴木 久光

川崎市立高津中学校校長

馬場 政弘

川崎市立東小倉小学校校長

塚田 庸子

川崎市立柿生小学校校長

荒木 和男

川崎市立東高津中学校校長

松田 滋充

川崎市教育委員会人権担当主幹

小宮山健治

川崎市教育委員会指導主事

須山 一俊

川崎市教育委員会指導主事

見富 信義